



186号

2013/9/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



【女王谷のお祭りを見物する女の子】(四川省丹巴县中路郷、2007年9月)
女王谷でも特に色々な部族が混じっている丹巴は美人が多い事で有名です。目鼻立ちがハッキリしていて表情豊かなこの女の子も将来美人になるでしょう。余談ですが、おめかししてお祭りを見物に来ていた可愛い女の子にカメラを向けたら、私が当地で何度かモデル撮影した子で、私のカメラに慣れているせいか臆せず「ごっ」と見せぬらわてしまいました
(四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健二)

今年の夏の暑さは格別でした。暑さも降水量も記録的で、「観測史上初」と言う数字が新聞紙面に躍る異常な夏でした。気象現象は過酷でしたが、幸い、季節は順序通りに巡って、立秋を過ぎた市場には、秋の味覚が出回り始めました

秋の味覚の先駆けは桃でしょうか。今は温室栽培などで、出回りが随分早くなりましたが、自然のものはやはり8月からでしょう。桃の出回る季節になると、北京の桃を初めていただいた時のことを思い出します。

その時は友人達と4、5人で出かけ、北京の友人宅で夕飯をご馳走になりました。食後のテーブルに、桃が山のように積まれて出て来ました。桃は、日本の、「形が揃っていて果実の肌は桃色にほんのり赤味」と言う基準から見るとかなり野生的で、「形は不揃い、果実の色も赤やピンク、緑がかった所すら在り」と言うものでした。第一、実がしっかりと置いてかなり硬いように感じました。頂く前に、甘味が薄くて、ガリガリとした歯ざわりを想像してしまいました。

更に驚いたことは、お家の方から丸ごとの桃を手渡されて、「食べて、食べて」と言われたことです。どうやら中国の人々は、桃を皮付きのまま食べる習慣のようです。我々は我儘を言って、ナイフを出して貰い、皮をむいていただきました。それで、その友人宅では、その後日本から客が来ると、桃はナイフと一緒に出してくれるようになりました。

ところで、その桃のお味ですが、一口頂いて、ビックリしました。日本の桃ほど柔らかくはないのですが、ガリガリではなくて、それなりにねっとりして甘いのです。外見から予想したのと全然違いました。水蜜桃のようにかじると果汁が滴り落ちるほどではありませんが、充分ジューシーで、柔らかくて甘いのです。手に取った時の硬さは何なのだろうと訝しく感じました。それでいっぺんに中国の桃の虜になってしまいました。

日本のスーパーの桃売り場では、一つ一つ発砲スチロールのネットを穿かせて、二つとか四つとかをプラスチックのお皿に乗せラップをかけて売っていますね。「桃を指で押さえないでください」と言う注意書きが出たりして、大層神経を使って売っています。ところが北京では、軽トラックの荷台とか、道路わきの地

面に敷いたシートの上に、山のように積み上げて、1斤(500g)いくらで売っています。売る方も買う方も余り神経を使わないので、実を選ぶ時に山が崩れて、ごろごろ転がっても平気です。桃の実もそれぐらいの試練には充分耐えて、傷が付くようなことはありません。そして、そのお値段がまた驚く程安いので、北京では毎日桃の食べ放題でした。

初めての北京旅行の帰途、空港まで送って頂く途中の道端で、馬車の荷台に積んで売っている桃を見つけて歓声を上げると、友人のお父様が「お土産に」と、一人5、6個あてに買って、それぞれビニール袋に入れてくださいました。我々は大感激で、スーツケースの引き手ハンドルに結び付けて通関しました。北京での出国は勿論、成田での入国にもそのままの状況で通ったのですが、何も言われませんでした。

帰宅途中の電車の中で、楽しかった旅を反芻している時に、生の動植物の持ち込みは、検疫を受けなければいけなかったことに気が付きました。通関の時はまったく思いもせず、無邪気な様子だったので、係員も気が付かなかったのでしょうか。昔、期限切れの定期券で電車にのり、途中で気が付いて、降りてから買おうと思いながら改札を通ると、「お客さん、定期が切れていますよ!」と声を掛けられたのと同じことでしょう。それ以後、桃の持ち込みは試みていません。

北京には、日本で見かけるような形の桃の他、蟠桃(pántáo=パンタオ)という扁平の桃があります。辞書には蟠桃と書いてありますが、北京の友人は扁桃(biǎntáo=ビエンタオ)と呼んでいました。丁度、普通の桃を種の下から押しつぶしたようで、果実は種の周りに盛り上がるように付いていますが、種の下に実が無いので、どんなに大きくなっても、横から見ると上下は平らに見えます。ちょっと次郎柿を極端にしたような感じです。中国仙界の女王・西王母の庭に育ち、宴卓の三宝に山積みされていたのを、孫悟空が食べ散らかした桃は、この蟠桃だそうで、中国の方たちはこの桃が好きです。味は普通の桃と同じように美味しいのですが、私はちょっと食べにくい気がします。それに、西王母の桃と言うからには、やはり桃太郎さんが生まれ出た様な、姿の良い桃であって欲しいと、私は勝手に思っています。

私の調べた諺・慣用句 22
棚からぼたもち

三澤 統

私たちは何かの偶然や巡りあわせで、労せずして欲しかった物が手に入ったり、かねてからの願いがかなったりしたときに「これは棚からぼたもちだ!」と言ったりしますね。

中国にもこれと似た意味を持つ四字成語があります。それは「守株待兔」です。読んで字のごとく“(木の)株を守って兔を待つ”ということですが、さて、この成語のエピソードはどんな内容の「たなぼた」でしょうか。

辞書には次のように載っています。

めてしまいました。そして例の切り株のそばに座ったまま兔が来るのをじっと待っていました。彼は、又野兔が切り株にぶつかって死に、それを持ち帰って料理し、お腹いっぱい食べることを期待していたのです。

一日が過ぎ、二日が過ぎ、十日が過ぎて、半月が過ぎましたが、農夫は切り株にぶつかって死ぬ二匹目の兔を得られないばかりか、自分の田地もすっかり荒廃してしまい何も収穫することができませんでした。

このことはあつという間に宋国全体に広く伝わり、人々の笑の種になりました。そもそも野兔が切り株にぶつかって死んだのは非常に稀なことであったのですが、この農夫はその偶然を必然と思い込み、あろうことか本来の仕事である農作業さえ放棄してしまい、その偶然の出現を待っていたのです。

〈注記〉

かんびし
韓非子：中国戦国時代の法家である韓非の著書。内容は春秋・戦国時代の思想・社会の集大成と分析とも言えるものである。

後世では、諸葛亮が幼帝劉禪の教材として韓非子を献上している。
(ウィキペディアより)

▲小学館 デジタル辞典：

「棚から牡丹餅ぼたもち：思いがけない好運を得ることのたとえ。たなぼた。」

▲小学館 中日辞典：

「守株待兔(shǒu zhū dài tù)切り株の番をしてウサギを待つ；自分では努力しないでうまい収穫にありつこうとすること。棚からぼたもち」

この成語の由来は「韓非子注・五蠹ごとつ」の

“宋人有耕田者，田中有株，兔走触株，折颈而死。因释其耒而守株冀复得兔。兔不可复得，而身为宋国笑(宋の人が畑を耕していると兔が走り出てきて畑の中の切り株にぶつかり首の骨を折って死んだ。以来再び兔を得んと、鋤を放り出しその株のところで待ち続けたが兔を得る事は無く笑いものになった)”の部分です。

昔、中国の宋国に一人の農夫がおりました。ある日、畑で仕事をしていると突然一匹の野兔が遠くからこちらへ突進して来るのが見えました。その兔はやみくもに走り回って、とうとう一本の木の切り株にぶつかってもんどりうって倒れ動かなくなってしまいました。農夫が急いで切り株のところへ行ってみると、兔は首の骨を折ってすでに死んでいました。彼はこれは儲けものをしたと大いに喜んで、その死んだ兔を拾い上げ、家へ持って帰りました。その晩は兔を料理して、肉をたら腹食することができました。それはそれは美味しい肉でした。

二日目に農夫は農具を放り出して、もう農作業は止

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽に寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になりますが、年度間の新入会をいつでも歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’
途中入会は会費の割引があります。お問い合わせください。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

唐の貞元(紀元785～805)時代、淳于棼^{じゅん とうふん}という人がいました。先祖からの豊かな財産を引き継ぎ、その上たいそう豪気な性分で義侠心の篤い男でした。曾ては地方の軍の重要な職に就いていましたが、細事に拘らなかつた為、上司の機嫌を損ねて官職を失ってしまいました。その後、あちこちを転々とした後、広陵(揚州)に住みつくようになりました。気に入る仕事が見つからないまま、毎日、酒を飲んで友人達と語り合っただけで過ごしていました。

淳家の庭には大きな槐^{えんじゆ}の木がありました。何百年も経た古い木だそうです。大きく広げた枝は重いほどに葉を繁らせていましたので木の下には広々とした日陰が広がっており、梢をわたる風が葉をそよそよ揺らしてなんとも言えない気持ちのいい場所を作っていました。

南方の九月はまだまだ暑い季節です。淳は大勢の友達と大きな槐の木の下で世間話をしながらお酒を飲んだりして、賑やかな時間を過ごしていました。何時間も飲み続けて淳は酔い潰れて意識もはっきりしない状態になってしまいましたので、二人の友達が淳を支えて東の軒の下の廊下まで送り、椅子に横にさせました。

淳はうとうとまどろんでいると、紫色の服を着て、使者のような二人の男が淳に近づいて来ました。二人は淳のところに来ると跪いてお辞儀をして、言いました。

槐安国^{かいあんこく}の国王の命令で淳様をお迎えに参りました

淳は心の内で「槐安国という国などこれまで聞いた事はないが。さてどういう国だろうか? とりあえず行ってみようか」と思いながら立ち上がり、服を整えて二人の後について庭を出ますと玄関の外には、すでに青い馬をつないだ四頭立ての馬車が待ちました。馬車の左右には従者らしい者が七、八人立っており、淳に恭しく手を貸して淳を馬車に引き入れました。

どこにいくのだろうか? と淳が思っているうちに馬車は槐の木の方に向かって走り出しました。やがて、大きな洞窟が見えて馬車はその中へ向かって進んで行きます。淳の周りには顔見知りの人もいないので

訊こうにも訊けず、ひたすら周りの風景を不思議に思いながら見ているだけでした。目に入る風景は見慣れた風景と微妙に違ったとても美しいところのように思われます。緑の山々、滔々と流れる川、青々とした森、名前の分らない草や花…、まるで桃源郷に来ている感じでしたが、風景は段々に車や人通りが多くなって町のようなところになってきました。

「注意しろ! 道を空けろ!」と御者は大きな声で通行人達に向かって叫びながら、馬車を急がせましたので、人々は足を留めて淳の一行を見送りました。そんな人々の様子を見ているうちに、淳は自分がひとかどの立派な人物になったかのような気持ちになってきました。

馬車の前方に、幾重にも反り返る軒先の、高く聳える楼閣を備えた立派な城が現れました。紅い城門の、その真ん中には扁額が掛けられ、「大槐安国^{だいかいあんこく}」と金の文字できらきらと眩いばかりに書かれています。

淳が乗る車の列を見た門衛が急いで前へ進み出て頭を下げ、お辞儀をしているところへ、城中から馬に跨った兵士が走って来て「王様の伝言でございます。お嬢様は遥々お出かけくださいませお疲れかと存じます。先ずは、どうぞ東華館でお休みくださいませよとのことです」と告げ、一行は東華館へ案内されました。

案内された東華館は、色とりどりの欄干を巡らせ、素晴らしい彫刻が施された柱の豪華な建物です。庭のあちこちには珍しい樹木も植えられています。建物の中にはいかにも高級な家具が備え付けられています。そして、食卓には手の込んだ食器や酒具がきちんと並べられ、山海の珍味と共に美味しそうな料理も既に用意されていて、いずれも淳の好みに合うものばかりです。

淳は、ここに来るまで既に半日間も馬車に揺られて確かにお腹が空いたのを感じていましたので、十分満足できるまで食べました。

食事が終わった頃、使者が再びやって来ました。

「右丞相殿が外でもう長らくお待ち申し上げております。そろそろ王様に面会する時間ですのでお出かけ下さいませ。ご案内いたしましょう」

王様にお目に掛かると聞いて、淳は急いで部屋を出ると、玄関の外に紫色の官服姿で象牙の笏しやくを持つ人が礼儀正しく挨拶して出迎え、共に王宮に向かいました。

ほどなく前方に宮殿らしい建物が見え、建物前の道路の両側には様々な武器を持つ兵士達が並び、宮殿の階段下には官服を着た役人達が多数並んで、物々しい雰囲気ふんいきを漂わせています。

淳は緊張気味に頭を低く下げて、右丞相に後について宮殿に上ると丞相に真似て土下座しました。

「淳様がおいでになりました」と通す声が聞こえると、今度は「おう、そなたが淳于棼殿か？ では、楽にして話し合おう」と頭の上でいう声が聞こえました。淳は立ち上がり、頭を上げて、王様を見ました。王様は白い絹の長衣を着て紅色の冠を被り、王座に坐っています。

「おう、確かに堂々たる美男子だな。お父上様は我が国が小国であることを気にせず、両家の婚姻を承知され、朕の次女をそなたに嫁がせることにした。今夜は、そなたは東華館に泊まり、明日、結婚披露宴をおこなおう。いかがかな？」

淳は「お父上様」と聞いて、ぼうっとしてしまい言葉が出てきません。実は、淳の父親は何年も前に兵を引き連れて辺境に向かい、そこで敵と戦っていました。しかしある時、戦いに敗れたと聞きましたが、これまでずっと音信が途絶え生死不明のままでした。

父親はどのようにしてこの大槐安国の国王と知り合い、またどうしてこのような婚姻を決めたのか？と、淳の頭の中は色々な質問で一杯になりましたが、今はそれを尋ねる場ではないと諦め、黙っているしかありませんでした。そして淳は王様に別れの挨拶をすると再び東華館へ戻りました。 (続く)

智子の雑記帳 95

映画『風立ちぬ』を観て、考えたこと

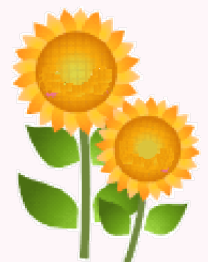
映画「風立ちぬ」を観た。賛否両論ある映画で、意見の分かれ方が興味深く、観にいった。評価が分かれるものに触れるとき、どちらの意見により近いかで、自分がどんな人間なのか、なんとなく分かるものだ。

結論から言うと、私は、この映画をとっても魅力的だと思った。賛否があるのも頷けた。この映画のテーマのひとつが「矛盾」だと言った人がいるが、まさに賛否の評価を包括していることこそが、この映画の良さだともいえる。

物語は、ゼロ戦が生み出されていく流れを縦軸に、主人公二郎と妻の菜穂子との恋愛を横軸に進んでいく。私は、二郎が時代を背負って、ゼロ戦を完成させていく様に惹かれていった。「彼はゼロ戦の設計という形で、戦争に加担した」と言ってしまうことはたやすい。しかし、あの時代はすべてが戦争に直結していった。自分の才能を開花させ、やりたい仕事を全うするには、戦争に加担するしかなかった自然な姿がそこにはある。

戦争に加担する気持ちがなくても、結果、そうなってしまったという姿は、現代に生きる私たちすべてに繋がっているように思えてならない。というのも、100年後を生きる人たちに、胸を張って対峙できるのかと問われたとき、私はまったく自信がないからだ。それどころか、日々入ってくる原発事故のニュースに触れるたびに、未来の人たちに申し訳なく思う。彼らに、「なぜ、日本は原発に頼らなくてはいけない電力供給システムを選んだのか」と問われたとき、無関心で節電もせずに事故以前を生きていた私は、返す言葉を持たない。

映画で、余命わずかの妻と一緒に時間を過ごしたい、けれど仕事を辞めるわけにはいかない、という二郎に対して、上司が「それはエゴではないのか」と問いかけるシーンがある。「生きる」ということは、矛盾を抱えており、エゴであって、罪深いことなのかもしれない。 (真中智子)



「ケレザ・ママ」とは、キルギス共和国からの留学生ケレザさんのお母さん・アジルブブさんのことである。本稿ではケレザ・ママと書かせていただく。可愛い末娘が異国の地、日本でどのような日々を送っているのか心配で、様子を見に本年(2013年)3月に来日された。

後述するように我々に深い印象を残したケレザ・ママは、6月12日(水)夕方5時小雨模様の中、キルギスの首都「ビシュケク」に向けて成田空港から飛び立った。現在成田からの直行便は運航しておらず、大韓航空で仁川空港に行き、そこでウズベキスタン航空に乗り換えウズベキスタンの首都タシケントへ。そこで更にビシュケク行き

の便に乗り換えなければならない。私と柚野さんとお見送りに行ったのであるが、帰りの車中でケレザさんに「ママが無事到着されたら一報ください」とお願いした。大丈夫とは思っても一人で帰国されるのだし、少なくとも大韓航空のキャビンアテンダントには母国語もロシア語も通じないであろうし、しかも他国の飛行機に2回も乗り換えるのだから心配しない方がおかしい。

実はもうひとつ心配事があった。私の車のトランクには米俵に似た黒い布製の旅行鞆の他に手荷物用の大き目なバッグが3つくらいあった。布製の旅行鞆にされたのは大韓航空の荷物の重量規制のためで、すこしでも軽くするためである。20キロを超える場合は超過分はすべて有料なのだが、カウンターで計るとかなり超過していて別途4万円くらいかかるというのである。なにしろ3か月滞在されたのでお土産の山であるという。

カウンターの職員に何とかならないかと交渉したが埒が明かない。職員は日本郵便の受付に行き急がない物は郵便にすれば2万円くらいで済むのでは、とアドバイスしてくれる。ともかくそこに行って荷物を整理しなおすことになった。重い本などはケレザさんが

持ち帰ることにしたり、日本郵便の方の親切な対応で段ボールに整理して入れなおしたりして何とか2万円を切るくらいになった。ただ郵便は2週間あまりかかると言われ、またキルギスとはEMSはないので何かあった時の追跡調査は困難といわれた。果たして無事届くのか心配になった。神様がケレザママと小包を守ってくれると信じるほかはない。

翌日の6月13日は‘わんりい’の定例会があり私も出席した。午後3時ころ私の携帯が鳴った。すぐ開くとケレザさんから、「今日の午後無事について、今親戚の人と家でにぎやかにやっています。」とのことであった。‘わんりい’の田井さんをはじめ出席していた皆さんから安

堵の声が上がった。皆それぞれ心配されていたようである。帰国に要した時間は約20時間である。地図を見てもキルギスは遠い遠い国で、これまで気にも留めなかった国である。しかしケレザさんとケレザ・ママのおかげで一気に身近な国となった。

3月21日にケレザさんを囲むキルギス料理の会があった。私は、この日は用事があり欠席したが、「若しかしたらママも参加するかも」とケレザさんが言っていた。実際にケレザ・ママが日本に来たのはその2、3日後で、‘わんりい’の皆さんも含めて私がはじめてケレザ・ママと会ったのは4月5日の、わんりいメンバー達とのこどもの国でのお花見の会であった。

今年の冬は雪も何度か降り寒かったのであるが、桜の開花はとても早く町田市は3月26日ころ満開となった。したがって、花見の会は散り始めた桜の花の下で始まった。当日は晴天となり全員で12名の会はにぎやかで、各人が持ち寄った料理はカラフルでシートの上で美を競った。時折風が通り抜け、その都度頭上に料理に花びらが振りかかった。ケレザ・ママは笑みを絶やさず、言葉は通じないが皆にいろいろと話し



薬師池公園の藤の花をめぐるケレザ・ママ

かけられていた。言葉は分からなくとも身振り手振りもあって何となく通じ合えるものである。すぐに12人の輪に溶け込んでいかれた。朝作られたというキルギス風スナックを持参され、私達もおいしくいただいた。たのしいおだやかな春の一日であった。

それから一週間後、田井さんから「あなたの家の前の八重桜が満開だから、ケレザさんとケレザ・ママを今から連れて行くので、11時ころ桜通りに出てきてくれますか?」と連絡があった。染井吉野はほぼ散っていたが八重桜はちょうど満開で、家の前に出ると3人が私に向かって手を振っていた。朝は快晴だったにも拘らず、三輪緑山(町田市)に着いた頃から時折にわか雨がぱらついたが、八重桜の並木道を4人でゆっくりと散策した。ケレザ・ママは楽しそうに話しかけられた。日本語をすこしずつケレザさんから習っているようで、片言の日本語が話せるまでになられていた。

その後3回ほど三輪コミュニティセンターで、'わんりい'の皆さん達とケレザ・ママを囲んで一緒に日

本料理やキルギス料理を作って交流した。一回目は5月の連休中でケレザさんが一緒に参加されたが、その後はケレザ・ママが一人だった。十分な会話はできなくとも、ケレザ・ママはいつも心から楽しんでいる風な満面の笑顔で、私達も大いに楽しんだ。

ケレザさんは勉強が忙しく、ママは一日中家で留守番していることが多いと聞いたので、'わんりい'会員の杉野さんと相談して、日本の喫茶店を見せてあげてそこで簡単な日本語教室を開こうということになり、鶴川にあるコメダ珈琲店にご案内した。飲み物を注文するとママは手提げから大学ノートを取り出した。我々はケレザさんをお願いして作っていただいたキルギス語と日本語の比較表をもとに勉強を始めた。たとえばこんな具合である。凶鑑にある花を指さして「ばら」とか「ぼたん」を指さして日本語の発音をする。ママは発音した後、大学ノートにキルギス語でその発音を書き留める。挨拶語はお互いに教えあう。「こんにちは」は「カンダイスズ」、「ありがとう」は「ラフマツト」とこちらでも少しキルギス語を覚えることができた。

後日またそのノートを見させていただくとバラやぼたんの花の絵を書いてそのわきにキルギス語で花の名前が書いてある。その絵はとても上手に描かれ、流れるような筆記体の文字は美しかった。とにかく日本語を習得しようとする意欲にはいつも感心させられた。日本語教室はやはり'わんりい'会員で、私と同じ三輪緑山の日高さん宅でも2~3度行った。波長が合うのか、ケレザ・ママと日高さんとは言葉が通じ合っているように私には思えた。

ここでキルギス共和国を知らない方のために、どのような国なのか紹介したい。偉そうなことを言っても私もつい最近まで何も知らなかったのであるが・・・。

以前はソ連邦の一共和国であったが、1991年民主主義国家として独立した。面積は20万km²なので日本(37万8千km²)の半分より少し広い。国土の40%が標高3千メートルを超える山国という。中央アジアのスイスとも言われるそうだ。中国との国境はあの天山山脈である。ケレザママが住むビシュケクは標高8百メートル、緯度は北緯43度とほぼ札幌市と同じだ。国花は、「エーデルワイス」と「チューリップ」だそうだ。通貨単位は「ソム」。

これから先は、ケレザさんから聞いたことであるがキルギス人の赤ちゃんも蒙古斑があるというのである。この一言で随分親近感が湧き出る。もう一つ日本



ケレザさん(左)とケレザママ(右) 'わんりい'のメンバー達と一緒に作った、草団子、精進揚げ、たけのこご飯を前に。於：三輪コミュニティセンター



キルギスのお菓子・トモモを'わんりい'メンバー達と一緒に作る 於：三輪緑やマコミュニティセンター

と同じなのは、女性は結婚したら姓が変わることだ。顔も日本人と殆ど変わらないのでこの地方は日本人のルーツの一つかもしれない。それからもう一つ。実はケレザさんはお父さんの顔を知らない。4人兄妹であるが、末っ子のケレザさん(上の3人は皆お兄さん)がまだお腹の中にいる時、水難事故で亡くなったそう。それからのケレザママの苦労は想像に難くない。

4人の子供を抱えて周囲は再婚を勧めたらしいが、ママは一人で4人の子供を育てる決意をされた。再婚して万が一その男性が子供たちにつらく当たったりすることもありうると思うと、どんなに大変でも自分一人で育てようということだったようだ。この様な状況下、キルギスでは素晴らしい習慣があるのである。伴侶を亡くしたお母さんには子供たちは「お母さん再婚してください」と言わなければならないそうだ。勿論生活が苦しいからお金持ちの男性と再婚してください、という意味ではなく母には母の人生があり私達子供の犠牲になる必要はない、という意味が含まれているという。

ケレザさんからこの話を聞いたとき、彼女と次のような会話を交わした。——「あなたもそのように言ったの?」「はい、言いました。」「その時お母さんは何て答えたの?」「お母さんはただ微笑んでありがとうと言いました。」「お兄さんたちも言ったの?」「もちろんです。」「——私はキルギスという国は何と心の温かな国だろう、と私までほのぼのとした気持ちになったのを覚えている。ケレザママと接すると伝わってくるものがある。それは子供への深い愛、誰に対してもやさしい気持ちで接する心と言えようか。一方で芯の強さも伝わって来るのである。閑話休題。

ママは花がとても好きである。田井さんはちょうど見ごろであった薬師池公園の藤の花や近くのポタリ園と菜の花畑、そして神代植物公園にも連れて行かれた。神代植物公園ではバラの花が満開でママを大いに満足させたようだ。バラの匂いを何度も嗅いだり、大輪の花の前で記念写真を撮ったり、また公園の奥にある温室では熱帯性の珍しい花々をじっと眺めて驚いた表情を見せた。大学ノートには日本で見た花がたくさん描かれていたが、そのうちノートは花で埋め尽くされてしまうに違いない。

さて、5月も終わりに近づきママの帰国の日が迫っ



江ノ島の海で無邪気にはしゃぐケレザ・ママ

てきた。帰国の日までもう一つ思い出を残させてあげたいと思いいろいろ考えた。ふとキルギスには海がないので江の島の海岸がいいのではと考え、日高さんと相談し5月29日に3人で江の島に向かった。天気予報は小雨であったが、気持ちが天に通じたのか時折薄日が差した。町営の駐車場に車を入れ、江の島にかかる大橋に向かってそぞろ歩く。大橋のたもとから砂浜に下りるときからママは心持興奮気味でさっそくサンダルを脱ぎ、海辺に向かって行った。

私と日高さんは海際からすこし離れたところに立って様子を見守っていた。ママは嬉々として水と戯れ、ズボンの裾はあげていたが、それが濡れるのもかまわず本当に嬉しそうであった。また貝殻を拾い集め大事そうに袋に入れていた。キルギスに持って帰るとのこと。ヤドカリを見つけ中から出てくるものを不思議そうに眺めたり……。子供に帰ったようであった。こんなに喜んでもらってお連れした甲斐があったというものである。そのあと鎌倉大仏にお連れした。11.3メートルの大仏様にはびっくりされていたが、大仏様はケレザママに微笑んでいたような気がした。楽しい時間と楽しい日々は瞬間に過ぎ去るものである。そして帰国予定日の6月12日がやってきたのだ。

思い出は尽きないがこのあたりで筆を置こうと思う。ともかくケレザママの印象は、美しい国キルギスと共にケレザ・ママと関わった‘わりい’の皆さんの心の中に強く残ったのではなかろうか。そして言葉はさほど通じなくとも気持ちは通じ合うものだということに改めて実感させていただいた。いつまでもお元気で、またいつの日か再会する日が遠からんことを願うものである。

私たち「方正友好交流の会」の活動によって、ハルビン市郊外の方正県にある日本人公墓の存在が少なからず人々に知れ渡ってきた。しかしこの会が、前身の「ハルビン市方正地区支援交流会」(以下、支援の会)の後を受けて発足した2005年当時は、まるで知る人は少なかった。

例えば、10人ほどの中国通の集まりの時、私たちが出版したばかりの『風雪に耐えた日本人公墓—ハルビン市方正県物語』をPRし「方正県に日本人公墓があるのをご存じですか」と問うと誰も知らなかった。その中に北京駐在経験の新聞記者が3人もいたにもかかわらず、である。

中国政府もことさら宣伝めいて日本人公墓の存在を知らせることもなかった。おのずとその存在を知っていたのは旧満洲に開拓民として入った一部の人、日中友好運動に古くから携わっていた人たちのほんの一部の人だけだったのではないだろうか。

詳しい経緯を省くが、「支援の会」の末端にいた私が初めて方正県の日本人公墓を訪れたのは1993年の時だった。そこには二つの公墓が建立されていた(写真右)。

正面に向かって右側に立つのが「方正地区日本人公墓」である。1945年8月9日のソ連参戦、8月15日の日本敗戦は、開拓民たちの環境を大きく変えた。ソ連兵たちの襲撃を避けるために開拓民たちの必死の逃亡が始まった。今まで微笑みで接した中国人たちが陰しい顔をして襲ってきた。

ソ連との国境沿いにいた多くの開拓民たちは、ハルビンまでたどり着けばなんとか日本に帰れると思っていた。ハルビンは遠いが、その途中にある方正に行けば、な

んとか生き延びることができる。方正は関東軍の食糧基地としても知られていた。時には幼子を捨て、あるいは絞殺し、人々は方正にたどり着いた。しかし関東軍はすでにいなかった。飢餓と伝染病が人々を襲った。そうして5000人近い人々が亡くなった。すでに方正地区では人民政府が成立していた。1946年春になると凍っていた死体は溶けはじめ腐乱してきた。人民政府はその死体を3日3晩かけてガソリンを放って焼いた。そうして方正県の砲台山に埋めた。

その白骨の山を1963年、残留婦人の松田ちよさんが再び見つけた。それ以前の1948年、松田さんが砲台山に入った時、その白骨の山を見つけたが、ただ草花を捧げ、南無阿弥陀仏を何回か唱えることしかできなかった。しかし今度は違った。松田さんはなんとか自分たちで埋葬できないものかと思ったのである。公墓建立はこんな経緯から始まった。

(続く)

ほうまさ
ほうまさ
方正日本人公墓とは何か
ほうまさ
方正友好交流の会事務局長・大類善啓
おおるいよしひろ



‘わんりい’ 6月号「中国城市めぐり(25)・紹興市そのⅢ」(‘わんりい’ HP/ ‘わんりい’ 会員達のエッセイ <http://wanli-san.com/teranishi/title.html>) で、筆者の寺西英俊さんは、文の最後で「方正地区日本人公墓」に触れている。関心を持たれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。毎月発行の‘わんりい’をお送りしている日中友好協会機関紙「日本と中国」の元編集長・大類善啓氏が、この「方正地区日本人公墓」の紹介活動を続けている「方正友好交流の会」事務局長を務めていらっしゃる、日本人公墓の存在を知りました。

日中友好の礎として、この公墓の存在意義を感じ、一人でも多くの方に知って頂きたい、大類氏にお願いし、特別に‘わんりい’のために「公墓」と「方正友好交流の会」について3回シリーズで寄稿頂きます。(田井)



最近、六戸町では郷土資料館移動博物館、六高祭、秋祭りなどがありまして、それぞれ見学、体験が出来ました。その中でも三日間の秋祭りは私の目を大いに肥やしました。

9月3日、六戸秋祭の初日でした。誘いをいただき、七^{しちひゃく}百地区で参加することになりました。早朝、七百公民館に行き、花作りなどの手伝いをしました。それから青森ねぶたの時の衣装を身に纏い、仮装行列に参加しました。ここで出陣する山車は「西遊記・火焰山の戦い」でした。唐僧が白龍馬に端座し、孫悟空が空中に舞い

上がったり、突っ込んだりしています。火焰山の炎が天を焦がすように勢いよく燃えています。これは中国文化です。過去、シルクロードツアーで何回もトルファンに行き、火焰山を目にしました。中国語講座の時には、シルクロードの基礎知識を皆さんに紹介したこともあります。

七百の山車は「太鼓競演会 最優秀賞」を受けました。この地区の皆さんと同様嬉しくなりました。戻る時に待機している他の地区の山車と会う度に、双方が精一杯太鼓合戦し、迫力がありました。観衆たちも盛り上がりました。これこそお祭りの魅力でした。

中日には流し踊りが行われました。私はゆっくり見物しました。各地区では参加者が多く、老若男女みんな真面目に出演しました。踊りの優美さ、衣装の素敵さはとても印象的でした。二回目は、それぞれ違う踊りで、普段仕事の忙しいみなさんとしては、事前の練習は大変だったでしょう。

最終日、出陣の待機は六戸小学校のグラウンドでした。運行責任者の附田さんに誘われ、太鼓を叩くことになり、待機の間、私は太鼓の練習をしました。運行中、私は山車に乗って、子供と共に太鼓を叩きました。下で見ると簡単なように見えますが、実際

にはそんなに容易なことではなく、ずっと緊張状態で、全体のリズムに合わせなければいけません。良い体験でした。それでまた、最優秀賞の太鼓の経験ですから、格別に有意義でした。

お祭りが終わり、反省会にも参加し、多くの方々と話し合うことが出来ました。最後にはみんなの前で挨拶をしました。「七百」を「七戸」と言い間違い、附田さんに注意され、「ビールをたくさん飲みましたから」と私が言うと、皆笑いました。

祭りの期間中の夜、私のアパートの前の通りには特別屋台が設けられ、私の目を引きました。いつもと違って人で賑わっていました。中国の町の雰囲気似ていました。ソバとか焼肉、おでんなどの屋台で食べながら、色々話も出来ました。とても楽しかったです。この屋台が毎日あればいいのに・・・。

初めての六戸の秋祭りは予想以上に盛大に行われましたが、家族や親子での参加が多かったらしく、その熱心さに感動しました。この祭りは伝統芸術の大集大成だと思います。これからも保ち続けられるようお祈りいたします。

(原文のまま掲載)

【お詫び】今月号掲載の写真は、'わんりい' 7月号で、「青森ねぶた」参加の鄧さんの写真として掲載しましたが、「六戸秋祭」参加の写真の誤りでした。編集者の不注意をお詫びし、改めて9月号に掲載しました。



「西遊記・火焰山の戦い」の山車。中央に座って、太鼓を叩いているのが鄧さん。

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。

台湾登山ツアー体験—⑤ 太魯閣溪谷、秘密のパワースポット

佐々木 健之

◆下山、虎爺温泉へ

今回のツアー登山では山小屋での酒盛り宴会は無かった。

2008年に、台湾南部の「北大武山(3090m)」に行った時には、満員の山小屋のあちこちで酒宴が開かれ、夜遅くまで盛り上がっていた。台湾の登山者に聞くと、若者の間では飲酒、喫煙は反社会的行為と見なされる雰囲気になっているようだ。それで若者の飲酒は減ってきているようだ。少し寂しい気もするが、台湾人の健康にはよいのだろう。

2012年11月25日、向陽山小屋での2日目の夜は明けた。朝食を済ませ7時出発。毎度感じる下山する日は天気がよい、と思うのはひがみ根性だろう。まったくピカピカの晴天でどうしてきのう晴れなかったのかと内心面白くない。

たいした難所も無く9時前に出発登山口の向陽工作場に着いた。

待っていた四駆車に分乗して、ツアーバスが駐車

している布農族の村「利稻」へ下る。行くときは集落の中に入らなかったが、帰りは休憩所のある村の中に入った。土産物屋のような軽食も供する商店でしばし休憩となる。土産物屋は原型不明の農産物を干したのものや、おきまりの飾り物などがあつた。小さめのクルミがあつたので買おうと思ひ声をかけた。すると原住民らしい店のおばさんは達者な日本語を使った。いわく、これは食用では無い、薬用に用いるもので買わない方がよいとさとされた。私は恐れ入って忠告を聞き入れ、何も買わなかつた。この地では、高山性の薬用植物が採取できるのであろう。一見の素人では買ひ物はできない。

土間のようなところで、ガイドはインスタントラーメンを作り、一同に勧めた。しかし私と連れ合ひは食へなかつた。なぜなら1時間ほどで下れば、最初の日に泊まつた虎爺温泉に着く。ここで打ち上げとなり、豪華料理を食べると思つたから、お腹は空いてはいたが我慢した。我ながらなんと卑しい心根だろう。

だが、虎爺温泉では期待したほどの豪華料理は出なかつた。けれども公平に言えば、設定料金に見合う、妥当な料理だつた。

「利稻」での休憩の後、全員ツアーバスに乗り、山あいの道を下る。振り返つてきのう登つたあたりの山並みを見れば、厚い雲が立ちこめ、少し前までの晴天はどこへ…。今日登つている人は気の毒になあ、と心に余裕ができてしまうから、私は俗人丸出しである。

車中で心地よい疲労感に浸つている間に、瑞穂の「虎爺温泉会館」に着いた。宴会を開く旅館の建物と、温泉施設とは別区画になつていて、まず温泉へ行く。

受付で手続きを済ませ、長屋のようなシャワー室へ行つた。この虎爺温泉は水着着用の施設だつた。事前の案内があつたので水着は持つてきた。個室のトイレが並んだようなシャワー室へ水着を持つて入り、まず体を洗つてから水着を着用する。シャワー室は保守管理が杜撰で、湯栓の不具合や、釣り棚の金具が壊れている箇所がちらほらあつた。

慣れない日本人たちがシャワーの使い勝手などを確かめている間に、すでに台湾人たちは体を洗い、水着を着て露天の大浴場に散つていた。夫婦者や、懐具合のよろしい人は、定員2人の「個室浴室」に入り、身



虎爺温泉入り口



浴槽内部、湯の色は褐色である



大陸からの観光客。落石に備えてヘルメットを着用する。



パワースポットの発生源

◆パワースポット

花蓮には2007年冬と2010年冬に行ったことがある。2度目の2010年に行ったときは、連れ合いの奥歯が持病の歯槽膿漏で具合が悪かった。

そのとき花蓮では、「馨憶精緻民宿」という経営者が日本人

の宿に泊まった。オーナーの片桐さんの案内で、私と連れ合い、友人Aさんの3人で景勝「太魯閣溪谷」を巡った。大手観光業者ではできない行き届いたよい案内だった。

溪谷内のある地点で、片桐さんが「ここにはパワースポットがあります」といって、断崖の対岸を指し示した。

片桐さんによると以前、その筋の権威者を案内してたまたまこの特異点を通りかかった。すると権威者が、ここには強力なパワースポットがあると、対岸のある地点を示したという。それからは片桐さんも興味を持ち、パワースポットに行きたい客を案内しているという。

私は、パワースポットなど怪しげな祈祷のたぐいと思っていたので、効力はもちろん、存在も信じなかった。

しかしせっかくの案内なので、いわれるままに、両手を広げて対岸の断崖に対峙した。私は別に何も感じなかった。ほかの二人も何も感じなかった。

ところがどうだ、連れ合いはその日のうちに、具合の悪かった歯が、すっかり治っていた。これはパワースポットの効果なのか、たまたま直る時期だったのか、検証できればいいのだが…。

しかし2年後に再び検証の時が来た。その間、連れあいの歯は、すっかり落ち着いて歯科医もどうして落ち着いたのか首をかしげていた。が、その効力も賞味期限をすぎたのか再び悪くなった。普通の歯科医ならとっくに抜いてしまうところだが、かかりつけの歯科は、なるべく抜かない方針なので、歯茎の掃除をしてだましだまし温存していた。

台湾登山の直前は、彼女の歯はさらに悪い方に傾いていた。だからパワースポットの効果が今度も果たしてあるのかどうか、片桐さんにお願

を清めていた。私も個室に入りたかったが、仕組みがよくわからず、連れ合いもいつの間にか見当たらなくなったので諦めた。

浴槽は温水プールのように広く、十分楽しめた。お湯が褐色なのは、鉄分が多いのだろうか？ 落ち着いてから入浴中の人を観察して気がついてののだが、衛生的見地からか水泳帽のようなものを被らなければいけないらしい。台湾人は男女とも水泳帽を被っていた。そこで私は手拭いを頭に巻き、素知らぬ顔をした。

お風呂が済むと、旅館の食堂で会食となった。テーブルは2つで、日本人7人全員と台湾人数人で一つのテーブルに座った。湯上がりだし、無事に下山できたのでまずビールで乾杯としたいが、ビールは無いという。食堂にビールが無いとは、ほんまかいなと疑問に思った。面倒をかけても飲みたい人は温泉区の受付にあるから買ってきなさいという。仕方なく50メートルほど離れた温泉受付まで行って缶入りの台湾ビールを買った。

もう一つのテーブル、台湾人だけの座では、ビールを所望する人はいなかった。料理が運ばれてきて皆でわいわい言いながら食べる。内容は田舎の宴会料理である。

一人の若者は、離れた小さなテーブルで皆と違うおかずを食べていた。この若者は何で自分だけ旨いものを…と疑問を生じたが、彼は肉食主義なので肉の入っていない料理を自分で注文して食べているようだ。台湾の人もいろいろだ。

12時半頃昼食が終わり、再びツアーバスに乗る。予定ではこのまま北上して、出発地の台北に戻る。到着予定は夜の7時過ぎとなっていた。

しかし、私たちは花蓮で途中下車することになってしまった。理由は…。

て太魯閣溪谷を再訪し、確かめることにしたのだ。

登山ツアーバスは、花蓮市街を抜け、飛行場脇を通過してから、とあるコンビニの駐車場に停車した。ここでトイレタイムと、私たち2人を降ろす手はずになっていた。

段取りは順調で、白い車の脇に立つ片桐さんが見えた。慌ただしく荷物を降ろし、今まで山を共にした仲間にあいさつもそこそこに、片桐さんの車に乗った。

太魯閣溪谷へ向かう途中で片桐さんがいった。「この頃は、大陸からの観光バスが多くて、車を止める場所が無いかもしれませんが、時間帯によっては、渋滞で動かなくなることもあります」

太魯閣溪谷とは大理石の山を「立霧溪」という川が浸食して形成した断崖絶壁が続く峡谷である。

その場所に近づくと、大型観光バスが何台も連なって路肩に駐車し、小旗を掲げたガイドを先頭に庶民的な身なりの中国人団体客がバスの間隙を練り歩いていた。

しかし、うまい具合に1台のバスが去って駐車できる場所ができた。

さっそく特異点の岸壁、やや左に傾いた縦の割れ目に対峙して未知の力を受け止めるような仕草で、両手を広げた。けれども私は前回と同じように、何も感じなかった。

次に、片桐さんが「感じる」ための模範を示した。拍手を打つように開いた手のひらを、打ち合わせる直前に止める。

私はどうせ、何事も起こらないだろうと、軽い気持ちで真似をした。すると、指先にしびれるようなビリビリ感があった。何度やってもシビれた。帰国してから同じことを、試してみたら何ともなかった。何か未知の力があるのは本当だろう。ただし、人により感受性が違うので誰でも同じようには感じないそうである。

パワースポットが存在する



花蓮にある馨憶精緻民宿、外観

として、歯槽膿漏に効くという保証は無い。

パワースポット再訪は、簡単に済んでしまった。歯槽膿漏に効果があれば、すぐに現れるはずだが…。結論として今回は効果は無かった。

◆花蓮あれこれ

夕暮れまで間があるので、花蓮に戻りながら観光となった。

まず、花蓮飛行場近くの魚市場へ行った。運がよければマンボウの水揚げがみられるという。花蓮港はマンボウが捕れる。しかしこの日はマンボウは捕れなかったようだ。市場の片隅で魚を捌く人がいた。客の求めで内臓を取ったり、切り身にする。順番待ちの列ができて賑わっていた。

そのあと鯉節会館などを見学していると、薄暗くなった。片桐さんのお薦めで花蓮漁港そばの「花蓮観光魚市」という飲食街に行った。客が市場で買った魚を持ち込んで料理をしてくれる「代客煮食」という看板を出した店が並んでいた。

入りたくなる店構えの一軒に入り、深海魚(名前は忘れた)の肉団子入りスープと、マグロの刺身を食べた。安価でうまかった。

日本人が経営するお茶屋さんへ寄った後、片桐さんの経営する「馨憶精緻民宿」にチェックインした。2晩の山小屋生活から解放され、一息ついた。「馨憶精緻民宿」は今度で2度目だが、その間に改装して、壁には大型液晶テレビが懸かり、前にも増して小ざれいになっていた。片桐さんは、日本人の視点で宿泊客の観光案内もしている。また、植民地時代の遺蹟を調べることもしており、台湾観光に来た日本人に紹介している。興味のある方は、「馨憶精緻民宿」で検索をかけるとよい。

盛りだくさんだった台湾登山はこうして無事に終わった。後日台湾の旅行会社から「台湾百岳登頂證書」というpdfファイルがメールで届いた。

（終り）



わんりいが活動を始めた1992年は、大川さんが精力的に世界各地に旅行した年でもありました。

「わんりい」ご活動20周年、おめでとうございます。20年もの間、活発に活動しておられる市民サークルは珍しいと思います。会員の方々の息の長い情熱とご努力に、深く敬意を表させていただきます。

私の四姑娘山との付き合いも同じ位長くて昨年7月に満20年を迎えましたが、日隆で建てている家の建築トラブルに気を取られて、残念ながら感慨に浸る余裕がございませんでした。一つ言える事は、日隆の長坪村の人達の生活水準がこの20年間に数10倍向上して日本に引けを取らなくなった事、或いは豊かな自然を考えると日本を超

える水準になったと言える事です。幾つかの要因が重なって当地の急激な発展は予想以上でした。生活水準は急激に向上しましたが、2000年代に「わんりい」の方々が四姑娘山を何度も訪れて友好を育まれた事、それに5年前の四川大地震の時に「わんりい」がお贈り下さった電気毛布は、今でも事あるごとに村人から懐かしがられ感謝されています。状況は随分変わりましたが、これ迄同様にお付き合い頂きたいと皆願っております。

事の序に私が20数年前に初めて四姑娘山を撮影に訪れて、その目的を達した写真をご紹介します。私の写真集「蜀山女神」にも掲載されている青いケシ "*Meconopsis horridula*" の写真です。この青いケシは大姑娘山の麓4500mに有る大岩の上に生えていましたが、2年後には残念ながら盗掘されて姿を消しました。私が2000年6月から四姑娘山に住み着いて微力ながら自然保護活動を始めた動機の一つにもなっています。

「わんりい」がご活動を始められた1992年、私は未だ東京のコンピュータ会社に勤めながら休暇を目一杯使って世界各地へ撮影に出掛けていました。5月にはエベレストで山岳飛行、8月はボルネオのオランウータン保護区、12月は黄山へ出掛けています。この時の未熟な出来栄の写真もご笑覧下さい。話が脇道に外れて来ましたので、この辺で筆を置かせて頂きます。状況の変化が予想以上に進んで困難が降り掛かるかも知れませんが、改めて「わんりい」の益々のご活躍をギャロンの地(女王谷)から願っております。



青いケシ "*Meconopsis horridula*"



1992年5月はエベレストで山岳飛行

大川さんのホームページはこちら

- 四姑娘山 <http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>
- 女王谷 <http://rgyalmorong.info>



8月はボルネオのオランウータン保護区へ



12月は黄山

大川さんと‘わんりい’の関わりは2003年12月から1月にかけて‘わんりい’会員が丹巴訪問したのがきっかけでした。2005年7月には‘わんりい’会員が四川省四姑娘山へ行き大川さんの手厚い案内で景勝地を巡りました。

2013 四川省高原花の旅・写真集

2013年7月中旬、日本からの8名が、中国四川省の、ヒマラヤの東端に位置する地方を旅し、このあたりに咲く、花色豊富な青いケシの花他、様々な高原の花を楽しんできました。

近年、厳しくなってきた植物保護政策によって撮影場所を明示できないのが残念ですが、旅で撮影の花の一部とスナップ写真をご紹介します。

*花の色など、‘わんりい’HPでご覧下さい。

(写真撮影：吉井勇)



花畑を馬に乗ってトレッキングする

スケッチ：関根茂子



新路海



雀兒峠



市場で売られていたキノコの山



1



2



3



4



5 シオガマギク属



6 ボンボリトウヒレン



グラモダヤ民族芸術センター その3

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

前回、織物クラスの先生から教わったキャンディとアヌラダプラ、クルネガラを結ぶ三角地帯に、さっそく出かけようと思いましたが、困った事に気が付きました。それは交通手段です。

この三角地帯は「文化のゴールドトライアングル」と呼ばれていて、スリランカを訪れる外国人観光客のほとんどがこの地域を目指して来ます。それだけに、宿泊施設は五つ星クラスのホテルからバックパッカー相手の安宿までそろっているので心配ありません。多くの観光客はコロンボの空港からエアコン付の観光バス等に乘って、この三角地帯の中を回ります。バックパッカーは鉄道や乗り合いバスを利用して回ります。ところが僕が考えている今回の手織り布(古布)探しの旅では、情報があれば三角地帯の中を縦横無尽に走り回らなくてははいけません。時間通りには来ない鉄道や、全く時間が当てにならないバスを待っているわけにはいきません。

そこで思いついたのがレンタカーです。ところが、やはり此处はスリランカ、簡単にはいきません。現在はどうか判りませんが、その当時は世界中の一寸した国なら何処にでもある、ハーツやバジェット等のレンタカー会社がスリランカにはありませんでした。コロンボ市内のホテルに当たっても、レンタカーは無く運転手つきのリムジンしかありません。友達にも聞いてみましたが、そもそもレンタカーというビジネス形態が判らないようです。何人かの友達は自分の車を貸してくれると申し出てくれました。でも、朝夕には自分の子供たちの学校への送迎、日中は商品の配達等車が無ければその日の稼ぎが無くなるような商売をしている人達である事は判っています。善意はありがたいのですが、それを受けるわけにはいきません。

そうこうしているうちに、一人の友人が中古車屋と交渉してくれて、僕がいったん車を購入し返却時に走行距離を加味して売却する、という話がまとまりました。ただし、保険がありません。これは相当にリスクがあります。更に、田舎で死亡事故を起こすとその場でリンチされてしまう等、色々怖い話を聞かされました。今回は付き合ってくれる様な暇な友人が見つからないので、一人で慎重に運転する他には術がありません。一人という事は運転だけでなく、通訳がいけないという事です。果たして、シンハラ語が話せない僕だけで、充分に探している古布の事を説明できるか不安でした。また、古布の話だけに年配の方から話を聞く必要があるのに、通訳無しで意思

疎通が出来るのか不安でした。こうなると得意の出たところ勝負です。出発の前にコロンボにある国立博物館に行き、古布の端切れを再確認し、このような端切れでも良いので、何とか手に入れたいと思いました。

先ずは、キャンディを目指して出発です。これまでは立ち寄った事が無いアンティークショップを一軒一軒覗いていく作戦です。キャンディロード沿いにはかなりの数のショップがあると目論んでいたのですが、意外な事にあまり数が有りません。象の孤児院のあるケガッラの町の郊外には何軒かのショップが固まってありましたが、此处でも収穫ゼロです。古い家具や農具、真鍮製品、木工製品、古銭などは何処の店にもあるのですが、肝心の古布が見つかりません。古布を探していると尋ねると、「有るよ」と言って店の奥から持ち出してくるのは比較的新しいバティックばかりです。手織りの古布だと言っても、なんでそんな古い物を探すのか、このバティックは値打ち物だからこれを買えといった会話に終始します。此处まではアンティークショップと看板は出ているものの、半ばお土産物屋の様な店ばかりだったので仕方ありません。この先もキャンディまでは収穫がありませんでした。

ペラデニヤを過ぎてキャンディの入口に近づくと、宝石屋やお土産物屋の数にはかないませんがアンティークショップの数も増えてきました。さすがにシンハラ王朝終焉の地です。これまで同様に古い家具もあります。祭事に使ったと思われる器具等も店先にあります。ペラハラ祭りで貴族達が着用していたと思われる衣装をあるではありませんか。これはビンゴかと思ったのですが、店員さんに聞いてみると、30～40年位前のものだそうです。残念！古布は有るか聞いてみても、此处までと同様に何でそんな物が欲しいのか、店先にある物を買っていけという対応です。

キャンディの町中に入って同様です。コロニアルスタイルで有名なクイーンズホテルの周辺やキャンディ駅の周辺にアンティークショップが集まっていますが、いかにも観光客相手の品揃えで、肝心の物がありません。アンティークショップ以外の店と思い、試しにサリーの専門店に聞いてみましたが、古布どころか店に置いてあるサリーのうち上等なものはインド製だそうで、お土産に買っていけと相当にしつこく迫られました。キャンディはスリランカ最大の観光地なので観光客相手の店が大半のようです。キャンディで古布を探すのは諦めて、アヌラダプラを目指して北上する事にしました。(続く)

7月21日から8月8日まで日本へ一時帰国した。久しぶりの帰国で、日本での滞在が大いにリフレッシュしたことは言うまでもない。昨年12月にスリランカに来てから約8か月、この間取り立てて困ったことや大変なことなどがあった訳ではないが、ただ、暑さやスパイシーな食べ物に少々うんざりしていたので、このあたりで一時帰国してみたいと考えてみた。

日本に帰ってからはあまり外に出かけることはなく、家でのおんびり過ごした。これが大変よかったと思う。幸いにして私が日本にいる間は涼しくて、リフレッシュするには最適な時期であった。スリランカの変化に乏しい気候風土やまた食べ物と言えばカレーに代表されるスパイシーなものばかりで、しかもバリエーションがない食べ物に体が拒否反応を示していた。約20日間の滞在で何とか日本食に癒されてやっと元気になり、スリランカに戻ることができた。

スリランカでは間もなくキャンディのペラヘラ祭りが開催される時期となった。「ペラヘラ祭り」というのは、100年以上も続いているアジア最大の仏教の祭典である。100頭以上のゾウがきらびやかに着飾り、踊り、楽隊、太鼓、アクロバティックなショーなど3時間にも及ぶ行列が市内を練り歩くもので、「ペラヘラ」というのは「行列、行進」を意味する。今年は8月11日から20日までの10日間開催された。祭りの開催時期はその年によって異なる。陰暦の7月から8月にかけてのエサラ月と二キ二月の間の満月の日を最終日

として行われる。私は今回19日と20日の2日間、大学の日本人同僚と共に見学に出かけた。ペラヘラ祭りはコロomboをはじめとして、ケラニヤ、ガンパハ、カタラガマ等でも開催されるが、何と言つてもキャンディのペラヘラ祭りが最大で、見ごたえがある。

祭りは「デーワレ・ペラヘラ」、「クンバル・ペラヘラ」、「ランドーリ・ペラヘラ」の3つに分けられ、それぞれ5日間ずつ区切られているが、街中を練り歩くのはクンバル・ペラヘラからで、日を追うごとに規模を大きくしていき、最終日に頂点に達する。最終日の次の日には昼間にディ・ペラヘラも行われるが、これはもう小規模で、それほどものではない。

この祭りを見るためにスリランカ中から、否、世界中から観光客が押し寄せる。そのためホテルを予約するのが容易ではなく、直前では予約が難しく、宿泊料も通常の2倍もする。幸いにして私はすでに3月に予約を入れていたので問題はなく、しかも料金も通常の料金で大丈夫であった。しかし、同僚は7月初めに予約を旅行会社に入れてみたものの、ホテルは取れたが、1泊の料金が250ドルと通常の倍の料金であった。

19日の朝バスでコロomboを出発し、3時間余りでキャンディに到着した。祭りは最後の終盤を迎えて、キャンディの街はものすごい人で混雑し、歩くのさえ容易ではなかった。キャンディと言えば先ずは仏歯寺ということになり、到着後ホテルに荷物を置き、見学



仏歯寺の正面



火の点いた輪を回しながら踊るファイアーダンス

に出かけた。入場料が1000ルピーもするので、あまり入りたとは思わなかったが、同僚は初めてなので行くことにした。幸いにして、レジデント・ヴィザを持っていたので、入場料は100ルピーとなった。この寺の目玉は何と言っても仏歯(仏陀の右の糸切り)が安置されていることで、このため仏教の聖地となっている。ペラヘラ祭りはこの仏歯を中心に据えて、この寺から出発し、戻ってくる。

祭りの様子を見てみよう。最終日(8月20日)が最大規模のパレードとなり、この日は毎年大統領夫妻も見に来られる。開始時間は20時を過ぎていた。決められた開始時間になると、合図の花火が打ち上げられ開始された。私たちは行列が通るルートが一番良いQueen's Hotel(クィーンズホテル)2階バルコニーから見学した。地元の人々は行列が通る沿道で座りながら見ている。彼らは良い場所をもうお昼頃から確保していた。外国人観光客用には指定席が販売されていて、一人70ドルもする。毎年値上がりしている。

祭りが開始された。最初に長い鞭を持った人々が登場した。これは祭りの先駆けとも言うべきもので、道路に鞭を打ちながら進んでいく。すると沿道にいる人々は彼らに硬貨を投げ与えていた。次に登場したのは、火の舞いを踊る青年たちである。大きな火の付いた輪を回しながら踊っている。中には小さい子供たちが大人の背中に乗って火の付いた輪を回している。バランスを崩すのではないかとひやひやしながら見ていたが、何事もなく、進んで行った。すぐ仏教旗や州の旗を持った人々が続き、やがて軽快な太鼓の音が聞こ

えてきた。縦長の太鼓や横長の太鼓が続々と登場し、それに合わせて踊りを踊る100人ほどの踊り手が現れ、沿道は興奮の坩堝と化していった。



キャンディアン・ダンスを踊る踊り手



仏歯を乗せたラジャと呼ばれるゾウ

さらにゾウに跨った土地役人とゾウ厩舎の長、在家総代、副在家総代、この祭りの見ものとも言うべき仏歯寺のゾウ(カスケードに収めた仏陀の歯を背中に乗せている)、ウェスダンス、キャンディに祀られている国の四大守護神の各神殿のゾウ(ナータ、ヴィシュヌ、カタラガマ、パッティニの順)、各神殿の総代、輿が続く。このほかにも女性を中心とした農耕をテーマにした踊り、アクロバティックな見せものや踊りなど延々と3時間にも及んだ。終了したのは11時を大幅に過ぎてしまっていた。

最後に紹介しておきたいが、毎年日本から参加しているスリランカ人がある。元々ウェスダンスの名門の出で、キャンディアン・ダンサーとして父親と共にスリランカで活躍していた人物(川崎市溝の口にあるレストラン「スラサ」の経営者スサンタ氏)であるが、日本に住むようになってからもこの時期だけは帰国し、祭りに参加している。さらにもう一つ付け加えるならば、日本から皇族高円宮家の長女承子(ときこ)様がペラヘラを見学され、現地のテレビや新聞には大きく報道されていた。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

今年のスリランカフェスティバルは9月21日(土)~22日(日)に代々木公園で行われます。

サハ共和国・ヤクーツクだより ④

杉嶋俊夫

日本に帰国して一月半経ちました。私がサハ共和国を訪れることは当分ないかもしれませんが、引き続き、あと数回、現地で見聞きしたことを書かせて頂きます。今回は、サハを象徴するものをご紹介しますながら、日本国内のサハ関連情報にも触れたいと思います。

■ サハといえば...

① **マンモス** サハは寒冷な気候ゆえに、たびたび良好な保存状態でマンモスの死体が発見されます。私の滞在中も北部地域で発見されたマンモスから血液と歯が採取されたというニュースを耳にしました。日本では2005年の愛・地球博でサハのマンモスが展示されて話題になりました。今も、2010年に発見されたユカというマンモスがパシフィコ横浜で展示されています。特別展マンモスYUKA/9月17日まで。(http://yuka2013.com)

② **ダイヤモンド** 意外に思われるかもしれませんが、サハはソ連時代からダイヤモンドの産地として有名でした。日本でも何年も前からサハダイヤモンドという企業が宝飾品の販売を行っています。もちろんヤクーツク市内にもダイヤモンド販売店や主に宝石を扱うショッピングセンターなどがあります。

③ **音楽** サハでは音楽活動が盛んです。ジャンルも、民謡・ポップス・ロック・ジャズなどが独自の発展をとげ、若者の間ではサハ語のラップ音楽が流行っています。サハが口琴(ホムス)王国とも呼ばれていることは以前触れましたが、その口琴が様々なジャンルで使われています。伝統音楽の流れをひくハティラーエフ夫妻や女性トリオ「アヤルハーン」は何度か日本を訪れています。今年も10月6日に上野でアヤルハーンのライブが予定されています。Sound live Tokyo 2013 (http://www.soundlivetokyo.com/2013/ajarkhaan.html)

④ **オイミヤコン村** 世界一寒い村として、最近、日本では毎年のようにテレビや新聞などで取り上げ

られています。個人旅行で訪れた日本人さえいるとか・・・。真冬は-50度まで下がるそうです。この村に住んでいるのは、ツングース諸語(アルタイ系)のひとつを話すエヴェン人で、オイミヤコンとはエヴェン語で「不凍の水」という意味。ちなみに、(2)(4)に関しては、今年、朝日新聞ウラジオストク支局長の西村大輔記者が面白い記事を書いていらっしゃいます。そのうちまたサハの記事が載るかもしれません。

⑤ **映画** 演劇や映画制作の専門家を養成するコースがヤクーツクの大学・専門学校にあり、続々と新作が作られています。私はあまりタイミングが合わず2本だけしか観られませんでした。毎週ヤクーツク市内では、

参加費無料の映画カフェが開かれています。映画作品を鑑賞した後、その作品の製作スタッフを囲んで質疑応答が行われるのです。今年8月に、初めての試みとして、ヤクーツク国際映画祭が開催されました。

⑥ **夏至祭り** サハの伝統では6月が正式な正月で、6月に入るとサハの各地でその「正月」を祝う祭りが開かれます。ヤクーツク市郊外で行われる夏至祭りは、



夏至祭りのオープニング ヤクーツク市郊外で行われる夏至祭りは2日間行われ、2日目の夜明けには、伝統的な新年を迎える儀式が行われます。

近年、海外から訪れる観光客が増えているようです。

この他に、サハのキーワードを挙げるとしたら、「馬」、「サーカス」、「少数民族」、「ファッションデザイン」、「漫画」などが続くでしょうか。機会を見て紹介したいと思います。

最後にちょっと宣伝を…。9月29日(日)18:30～JR淵野辺駅近辺の施設でヤクーツク滞在のお話をさせていただきます。町田市内外の民族音楽関係者や人類学・民俗学研究者などが集う私的な集まりで、今回は私がゲストスピーカーを務めます。私の滞在期間は冬の終わりから僅か4ヶ月弱で、現地の一般家庭を覗く機会はなく、また、29日は”常連の参加者寄り”の話題提供が多くなると思われます。その点をご理解いただいた上で、参加を希望される方は、toshiosugi@gmail.comにメールでお申し込み下さい。(参加費無料。具体的な場所は申し込まれた方にお知らせします。)

平成25年度(第67回)文化庁芸術祭主催公演

2013アジア オーケストラ ウィーク

<http://www.orchestra.or.jp/aow2013/>

●会場：東京オペラシティコンサートホール

10月5日(土) / マニラ・フィルハーモニー管弦楽団(フィリピン) 15:00開演

10月6日(日) / サザン・シンフォニア(ニュージーランド) 15:00開演

10月7日(月) / 山形交響楽団(日本)指揮：飯森範親 19:00開演

●S席3000円 ペア券(S席2枚)5000円 A席2000円 B席1000円

3公演セット S席7000円 A席5000円

▲いずれも全席指定

●問合せ：日本オーケストラ連盟 ☎03-5610-7275(平日：10:00～18:00)



日本で発明された版画の技法「木を使ったリトグラフによる表現展」 MOKURITO

～中国広東省・韓山師範学院大学学生の作品展・潮州市の植物をテーマに～ 入場料：無料

●会期：2013年9月20日(金)～27日(金) 11:00～18:00/毎水曜日休館 *但し最終日16:30迄

●会場：世界観ギャラリー(JR総武線・御茶ノ水駅聖橋口5分/地下鉄千代田線・新御茶ノ水駅B3出口4分/地図検索:世界観ギャラリー「交通案内・地図」をご覧ください。

<http://www.gallery-mase.com/html/v2-mappage.html>

▲後援：独立行政法人国際交流基金 / 中国大使館

▲問合せ：☎世界観ギャラリー 03-3232-0204(間瀬)

私達はこの10年余の間、木を使ったリトグラフの紹介を国内外で積極的に行なってきました。2013年3月には韓山師範学院大学において、澤岡泰子(客員教授)他の指導によりMOKURITO(木を使ったリトグラフ)の授業をおこないました。個人作品のほかに、3人1組で90 x 90cmの作品11点を製作、その作品展示と授業及び製作の記録を発表します。 実行委員会/澤岡泰子、ギャラリー間瀬/間瀬勲



《咲いた木綿花》
欧陽竹筠 / 呉俊林 / 蔡咏琳

和光大学 連続市民講座 全4回「現代の神話・伝説」

http://www.wako.ac.jp/what_new/2013/2013-0805-1620-63.html

●場所：和光大学ポプリホール鶴川 3F多目的室
小田急線鶴川駅徒歩3分

●受講料：1回500円(学生は無料)

●受講日：2013年10月11日(金)/18日(金)/25日(金)/
11月1日(金) *各回18:30～20:30

1)物語の再生—映画が映し出す神話・伝説

2)神話なう:いま必要とされる神話

—アメリカ詩人 Gary Snyderの思想

3)入門『サブカルチャー神話/神話的サブカルチャー』

4)神話と現代—動物と人間の共生—

■申込方法ハガキ、FAX、Eメールで

「連続市民講座 現代の神話・伝説」と明記し、以下の必要事項を書いて送る。 ■電話でのお申込み不可

①氏名(フリガナ) ②郵便番号・住所 ③電話番号

④参加する回数(第〇回、全4回など)

▲各回の開催日1週間前までにお申込みください。

▲問合せ・申込み 和光大学 企画広報係

〒195-8585 東京都町田市金井町2160番地

FAX: 044-988-1594 E-mail: open@wako.ac.jp

—花は咲く— 東日本大震災の復興を願って

<http://www.ebican.jp/topics/79.html>

世界に誇るソプラノ・森麻季

日本で活躍のバリトン・崔宗宝

公演の収益金の一部を
「崔宗宝東日本大震災支
援奨学基金」に寄付します。

ピアノ：山岸茂人

ヴァイオリン：中澤きみ子

ゲスト：「崔宗宝東日本大震災支援奨学基金」受領者

佐藤千里(ソプラノ) / 根本真澄(ソプラノ)

海老名市文化会館・大ホール

2013年9月28日(土) 14:00開演

■参加費：S席：4,000円、A席：3,000円
全席指定席

■問合せ&申込：046-240-0836(崔宗宝音楽事務所)

主催：崔宗宝音楽事務所 / 神奈川中央新聞社「リベルタ」



残券、僅か! **林敏 揚琴 (ようきん) リサイタル・万里の絆**

日中文化交流市民サークル・わんりい 20周年記念と林敏来日音楽活動20周年記念として共催で開催します。
【出演】萩森英明(ピアノ・音楽監督) 樋口泰世(チェロ・東京交響楽団所属) 安田修平(コントラバス・東京交響楽団所属)



◆ 2013年9月20日(金) 19:00開演(開場:18:30)

◆ 和光大学ポプリホール 鶴川

<http://www.m-shimin-hall.jp/tsurukawa/>
(小田急線・鶴川駅下車北口3分 *駐車場はありません)

◆ 4000円(前売り3500円)

◆ お問い合わせ: ☎042-734-5100(わんりい)

※チケットは小田急線町田駅前久美堂本店2Fでも扱っています。



日中平和友好条約締結35周年/第23回文化之日展示の部 <http://www.toho-shoten.co.jp/toho/saiji13-046.html>

中国を彩ったポスター展 ~中国で開催された公演・展覧会ポスターを中心に~

1930年代から現代までのポスター 300点の中から、約70点を選びすぐり展示。
ポスターの一枚一枚から、当時の時代背景が見える。▲入場料: 無料

● 会期: 2013年9月26日(木)~10月20日(日) 10:00~17:00/ 毎水曜日休館

*但し初日は15:00開場、最終日16:00迄。10月18日(金)・19日(土)は20:30まで開館

● 会場: 日中友好開館美術館(JR総武線飯田橋東口7分/都営大江戸線・飯田橋C3出口1分)

◆ ギャラリートーク: 9月26日(木) 15:40頃~ ポスターとその背景について(約20分)

◆ 主催: (公財)日中友好開館/中国対外文化集团公司 後援: 中国大使館・他
問合せ ☎: 03-3815-5085 日中友好開館文化事業部



第23回中国文化之日 公演の部 京劇の小スター★中国小梅花公演団 来日公演★ <http://www.toho-shoten.co.jp/toho/saiji13-047.html>

11~14歳の少女少女たちの来日公演 10月18日(金) 19:00~ 10月19日(土) 13:30~/18:30~

10月20日(日) 13:30~ 全席指定前売: 1000円 9月上旬よりチケット販売開始。詳細は日中友好会館HPをご覧ください。

予告! 2013年10月14日(祭)於:町田中央公民館・調理室で「中国風ちまきの会」を予定しています。(詳細次号)

◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

- ▲ 場所: ままちだ中央公民館音楽室(7F)
- ▲ 月日: 9月の講座 9月15日(日)
- ▲ 時間: 10:00~11:30
- ▲ 講師: 植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲ 会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ 定員: 20名(原則として)



*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆ 申込み: ☎050-1531-8622(わんりい)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

- ◆ 動きやすい服装でご参加ください
- ▲ 場所: ままちだ中央公民館・6F視聴覚室
- ▲ 月日: 9月17日(火)・10月8日(火)
- ▲ 時間: 10:00~11:30
- ▲ 9月の練習歌「花は咲く」②
- ▲ 講師: Emmé(歌手)
- ▲ 会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ 定員: 15名(原則として)
- 申込み: わんりい ☎042-734-5100
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



'わんりい' 186号の主な目次

北京雑感(77)桃	2
諺・慣用句(22)「棚からぼたもち」	3
媛媛讲故事(56)「南柯太守の夢」	4
【智子の雑記帳】(95)「映画『風たちぬ』を観…」	5
中国・城市めぐり(番外)「ケレザ・ママの思い出」	6
方正日本人公墓とは何か	9
日本探検記(5) 秋祭の体験	10
台湾登山ツアー体験(5) 太魯閣渓谷、秘密の...	11
四姑娘山・写真だより(31)	14
2013 四川省高原花の旅・写真集	15
スリランカ紹介(70)「民族芸術センター その3」	17
スリランカ・ケラニアだより(6)ペラハラ祭を見る	18
サハ共和国・ヤクーツクだより④	20
'わんりい' 掲示板	21・22

【9月の定例会と10月号のおたより発送日】

- ◆ 定例会: 9月9日(月)三輪センター第3会議室 13:30~
- ◆ 10月号のおたより発行日: 9月30日(月) 三輪センター第5会議室 11:00より発送準備